

「油津の港物語」

宮崎県日南市

江戸時代、戦火で荒れた各地の城下町の再建が進められる中、豊富な山林資源を持っていた飢肥藩では、杉や松、楠などの巨木が大阪方面に運搬されていた。切り出した木材を酒谷川、広渡川を筏で流して油津に回送するには、広渡川の河口から一旦外海に出なければならなかった。波が荒く、潮の流れも複雑な外海では木材が流出することも多かった。

このため、飢肥藩 5 代藩主伊東祐実の命により堀川運河は開削された。工事は数十間(100m 以上)もの岩盤を掘削する困難なもので、断念しようとした奉行を祐実は叱咤激励して工事を進めさせたと伝えられ、貞享 3 年(1686)、2 年 4 ヶ月の歳月を要して運河は完成した。

堀川運河に架かる堀川橋は、明治 36 年に築造されたアーチ状の石橋で、映画「男はつらいよ」の舞台ともなった。吾平津神社(通称、乙姫神社)の参道も兼ねているため、地元では親しみを込めて乙姫橋と呼ばれている。

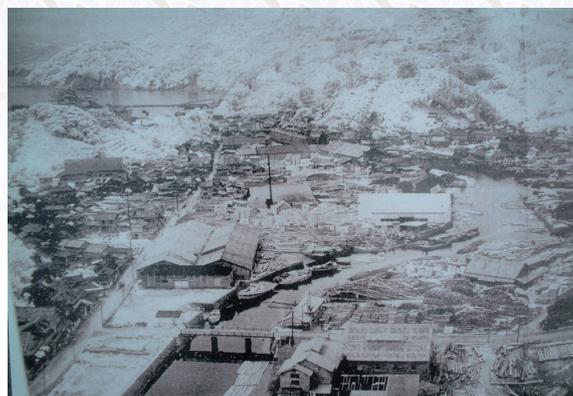
杉村金物本店は、明治から大正、昭和初期にかけて、油津港の整備や町の発展とともに大きくなった。主屋は総銅板葺きの木造三階建てで、昭和 7 年の建築である。後ろのレンガ造倉庫は、大正 9 年の建築で、主屋とともに文化庁の登録文化財であり、油津を代表する建物である。

チョロ船は、油津に伝わる伝統的な木造帆船である。平均的なチョロ船は、長さ五尋二尺(約 8.1

m)、幅八尺(2.4 m)、帆柱は船の長さより少し長めの六尋(約 9 m)と補助用のチャンコ帆があった。櫓は通常一丁立てで、地元の飢肥杉で作られていた。

チョロ船では、近海(油津の尾伏鼻十二海里沖まで)を漁場としており、延縄漁や一本釣りで、シビ、マビキ(シイラ)、ゲンバ(カジキマグロ)を主に釣っていた。

昭和 30 年代に姿を消したが、近年、油津の有志によって 2 艘が復元された。



かつての堀川運河(昭和10年)



マグロの水揚げ(昭和10年)

みどころ



- 油津赤レンガ館：油津の豪商河野宗人の倉庫で、大正 11 年に建築された。主屋とともに文化庁の登録文化財となっている。平成 9 年に、有志 31 名が一人 100 万円ずつ出し合って、買取保存した。現在は市に寄附されている。
- 鯨魂碑：江戸時代に、大嵐のため、油津の漁師が飢えに苦しんでいたとき、鯨が打ち上げられて、助かった。鯨は子どもを宿していたために、油津の人々は、親鯨の目玉と子どもを葬り、鯨魂碑を建てて、鯨に感謝した。